

# 倭建命の熊曾征討物語の生成(上)

島 山 篤

## 一 はじめに

◎景行記と景行紀 『古事記』(七二二年成立)は、現存する日本最古の史書である。その中巻の景行天皇の条に景行記に伝える倭建命の熊曾征討物語は、強烈なインパクトを持っている。そのハイライトは、倭建命が女装して熊曾建を征討するところである。同様の伝承は『日本書紀』(七二〇年成立)の景行天皇の条に景行紀にも伝えられているけれども、平板で景行記ほどのインパクトがない。

◎本論のねらい 本論では景行記を中心にして、この熊曾征討物語の展開を辿り、その生成を考察する。

以下の『古事記』の引用は『古事記・上代歌謠』[一九七九]により、『日本書紀』の引用は『日本書紀 上』[一九六八]による。

## 二 熊曾征討物語の展開

### 1 系図

◎系図 まず、倭建命の出自などの系図をみる。景行天皇(大帯日子淤斯呂和気天皇)は纏向の日代の宮(奈良県桜井市穴師の北)を都

にし、八〇人の御子を儲けている。倭建命はその御子の一人で、少年皇子時代の名を「小碓命」とも「倭男具那王(命とも)」ともいった。小碓命には兄王として「大碓命」がいる。母は「針間之伊那毘能大郎女」で、彼女は吉備国に勢力をもつ「吉備臣等の祖若建吉備津日子の女」である。倭建命の御子として帯中津日子命・仲哀天皇がいる。

大帯日子淤斯呂和気(大足彦忍別)・景行天皇

若建吉備津日子 — 針間之伊那毘能大郎女(播磨稲日大郎姫)

大碓命・天碓尊

小碓命・小碓尊(倭男具那王・日本童男)・倭建命(日本武尊)・帯中津日子命(足仲彦)・仲哀天皇

※( )は日本書紀の表記

◎三人の太子 景行天皇の八〇人の御子のうちに、「太子」が三人いる。「太子」とは次の皇位継承者として特別待遇される皇子ではなく、次の有力な皇位継承者の候補である。その三人の「太子」の一人が小碓命であり、その他の二人が「若帯日子命」と「五百木入日子命」である。後の二人の母は「八坂之入日売命」である。この「八坂之入日売命」の父は「八尺入日子命」であり、この「八尺入日子命」の父は御真木入日子印恵命・崇神天皇、母は尾張・美濃地方に勢力をもつ「尾張連の祖、意富阿麻比売」である。

御真木入日子印恵命・崇神天皇  
意富阿麻比売

八尺入日子命 (八坂入彦命)

大帯日子新斯呂和氣大足彦忍代別・景行天皇  
八坂之入日売命 八坂入媛  
若帯日子命 稚足彦・成務天皇  
五百木入日子命 五百城入彦 ※ (一)は『日本書紀』の奏記

結局、景行天皇の次の皇位は「若帯日子」・成務天皇が継承し、その成務天皇の次の皇位は倭建命の子の「帯中日子」・仲哀天皇が継承している。

## 2 碓を名にもつ双子

◎碓を名にもつ双子 景行記にはないけれども景行紀二年の条は、「大碓」と「小碓」は双子で、共に「碓」を名にもつ由来を次のように述べている。

其の大碓皇子・小碓尊は、一日に同じ胞にして雙に生れませり。天皇異びたまひて、則ち碓に誥びたまひき。故因りて、其の二の王を號けて、大碓・小碓と曰ふ。

『日本産育習俗資料集成』(一九七五)によると、双生児の出産にかかわる禁忌がかつては多く、とくに双生児を産むことを畜生腹と称し、忌まれている。また、碓を女性自身と見立て、分娩時に碓を伏せて置くと難産だといひ、碓を起こして祀るという。また、碓や榊に二人で穀物を入れると双子が産まれるので、そうするものではないともいふ。これらを踏まえて「日本武尊の世界」(桜井満、二〇〇〇、一三八頁)は、景行天皇が「碓に誥」ぶのは不祥として忌まれた双子を再び産まない呪法だろう、と述べている。

こうしてみると、小碓はもとより大碓にしても、産まれながらに祝福されず、父・天皇から見捨てられた皇子であり、悲劇的な存在だったことが暗示されている。

## 3 兄王殺し

◎大碓命の罪 次に、熊曾征討に至る経緯(兄王殺し)をみる。

是に天皇、三野国造の祖大根王の女、名は兄比売・弟比売の二の嬢子、其の容姿麗美しと聞き看し定めて、其の御子大碓命を遣はして喚し上げたまひき。故、其の遣はさえし大碓命召し上げずて、即ち己自ら其の二の嬢子を婚ひて、更に他し女人を求めて、詐りて其の嬢女と名けて貢上りき。是に天皇、其の他し女人なることを知らして、恒に長眼を経しめ、亦婚はずして、惚ませたまひき。

ある時、景行天皇が召し上げた地方豪族の姉妹を、仲人をした大碓命が横取りし、身代わりを差し出すという不祥事が起きた。大碓の不実を知った天皇は、献上された二人の女人が別人であることを見抜き、彼女たちに長い間侘しい思いをさせ、共寝をしないで悩ませた。このように天皇は不実を働いた大碓命を咎めずに、身代わりの女人を責めるといふ間接的な懲罰を下している。この屈折した処置は、卑怯者の大碓にとって耐えがたいものだったろう。

◎大碓命の殺害 その負い目があったからだろうか、大碓は参列を義務付けられていた天皇の朝夕の会食に顔を出さなかった。以下の展開は次のとおりである。

天皇、小碓命に詔りたまはく、「何とかも汝の兄は朝夕の大御食に参出来ざる。専ら汝ねぎ教へ覺せ」とのりたまひき。

如此詔りたまひて以後、五日に至りて、猶参出ざりき。爾に天皇、小碓命に問ひ賜はく、「何とかも汝の兄は久しく参出ざる。若し未だ誨へず有りや」とひたまひき。答へて白さく、「既にねぎつ」とまをしき。又詔りたまはく、「如何かねぎつ」とのりたまひき。答へて白さく、「朝曙に廁に入りし時、待ち捕へて搦み批ぎて、其の枝を引き闕きて、薦に裏みて投げ棄てつ」とまをしき。

大和朝廷の主権者である天皇の召し上げた女性を横取りすることは、王権に対する逆行行為である。また、朝夕の天皇の食膳に陪席することとは王族の義務で、これを理由なく怠ることは許されなかつたろう。父天皇はこの二重の負い目をもつ意気地ない大碓に対して、どのような思いを抱いたのだろうか、「どうしてお前の兄は朝夕の会食に参列しないのか、よくよくお前が『勞ぎ教へ覺せ』と小碓に命じる。その結果は、小碓が早朝に廁に入った兄王を掴み潰し、手足をいいで薦に包んで捨てるというものだった。

◎「勞ぐ」の両義性 この一見、不可解な残酷な行動を解く鍵は、『古事記注釈 第三卷』「西郷信綱、一九八八・二八八・二八九頁」が説くようににわざわざ仮名書きにしてある「泥疑」(原文) Ⅱ「勞ぎ」ということばにある。「勞ぐ」とは「慰撫する、勞う」義である。しかし、「勞ぐ」には逆に「痛めつける、ボコボコにする」義もあり、現在のヤクザの用いる「勞う」、「かわいがる」がその用法を残している。小碓の理解した「勞ぐ」はこの後者の義であり、彼は兄王を完膚なきまで「痛めつけ」て王権に逆らうことの過ちをたっぷりと「教え覺」した後、その死体をあつさりとして捨て去った。

常識的に考えると、天皇の発言の意図は大碓を会食に参列させることにある。それは、天皇が小碓に命令を出してから五日間も大碓が参列しないので、小碓に「自分の命令を実行していないのではないかと」発言していることからわかる。もし天皇の命令が大碓の暗殺であるならば、大碓の欠席は当然の結末で、小碓に問うまでもない。とする、天皇の発言の「勞ぐ」とは前者の義である。すなわち、己の罪に脅えて頑なになっている兄王・大碓を慰撫し、せめて会食に参列するように説得することを小碓に命じている。

しかし、天皇が命令を下した時点での文脈をよくみると、天皇の発した「勞ぐ」は後者の義だとも理解できる。大碓は、既に天皇に献上された女人を横取りしている。そして、天皇は大碓が朝夕の会食に参列していないことに疑問を呈し、大碓を詰問しているとも解釈できる。そして、直ちに「勞ぎ教へ覺せ」と続く。天皇が「大碓を朝夕の会食に出席させよ」と明言していないのも、重要なポイントになる。このように、状況は大碓に極めて不利である。天皇の命令は「天皇を欺いた大碓を取り敢えず食事に呼べ」だったのに、小碓の理解は「天皇を欺き、天皇の食卓につく義務まで違反する大碓を暗殺せよ」だった。

◎天皇のことばと心の二重性 実のところ、天皇のことばのみならず心も二重構造になっている。恐らく天皇の心は、事を穏便に済ませたい思いもあって表面上巧みに隠されるものの、その深層では肅清への思いもあつたろう。この大碓に対する天皇の心の二重性は、天皇に献上された女人を大碓が横取りして代わりに立てた女人を苦しめるといふ屈折した処置にも通じている。

「景行天皇と倭建命」[都倉義孝、一九七六、六一頁]が指摘するように、記紀の数々の反乱物語における鎮圧者側の反逆者に対する迅速な肅清行動を見ても、二つも罪を犯している大碓を直ちに処断するのが古代王権の秩序の体现者である景行天皇の為すべきことで、取り敢

えず会食に出席するように「勞ぎ教へ覺せ」という景行天皇のことは、考えられないほど手緩いものだった。そこで、小碓が天皇の深層に潜む反逆者への肅清への思いを見抜き、天皇のことはその本心の表れとして解釈したのは、当然ともいえる。小碓はかほどに的確に状況を判断し、人の心とことばを深く読み取れる切れ者だった。

◎知略・怪力・猛々しい荒い情 また、日常的に最も気を許して丸腰になって用をたす厠を殺害の場を選び、その智略の非凡さを見せている。そして、武器を使うまでもなく、持ち前の怪力を發揮して兄王を掴み潰し、手足をボキボキともぎ取っている。さらには、その遺骸を肉親はおろか、人並の葬り方もせず、塵芥同然の冷酷無残な捨て方をしている。このように、小碓は倫理、善悪を超越しており、神格的ともいべき猛々しい荒い情を持ち合わせていた。

この点『ヤマトタケル』『吉井巖、一九七七、三四・三五頁』は、碓の重さ、鈍なる性格から小碓を少々頭の回転の鈍い主人公と解し、父のことばを取り違えて兄を惨殺した、と解している。しかし、この解釈には疑問が残る。

#### 4 熊曾征討

◎熊曾征討 ハイライトの熊曾征討の条は、次のとおりである。

是に天皇、其の御子の建く荒き情を憚みて詔りたまはく、「西の方に熊曾建二人有り。是れ伏はず礼无き人等なり。故、其の人等を取れ」とのりたまひて遣はしき。此の時に当りて、其の御髪を額に結ひたまひき。爾に小碓命、其の姨倭比売命の御衣御裳を給はり、劍を御懐に納れて幸行でましき。

故、熊曾建の家に到りて見たまへば、其の家の辺に軍三重に

囲み、室を作りて居りき。是に御室楽為むと言ひ動みて、食物を設け備へき。故、其の傍を遊び行きて、其の楽の日を待ちたまひき。

爾に其の楽の日に臨みて、童女の髪をの如ごと其の結むすはせる御髪をを梳り垂れ、其の姨の御衣御裳を服し、既に童女の姿に成りて、女人をの中に交り立ちて、其の室の内に入り坐しき。爾に熊曾建の兄弟二人、其の嬢子を見感あはれて、己が中に坐せて盛まげに樂たのむに

故、其の酣たのむる時に臨みて、懐より劍を出し、熊曾の衣の衿ひもとを取りて、劍を其の胸より刺し通したまひし時、其の弟建見畏おそみて逃げ出でき。乃ち追ひて其の室の椅いすの本もとに至り、其の背の皮を取りて、劍を尻より刺し通したまひき。爾に其の熊曾建白言まことを、其の刀をな動うごかしたまひそ。僕白言まことすこと有り」とまをしき。爾に暫し許して押し伏せたまひき。是に白言まこととく、「汝命は誰にかます」とまをしき。爾に詔りたまはく、「吾は纏まと向むかひの日代宮ひしろのみやに坐まして、大八島国おほやしまのくに知らしめす大帯日子おほおびのひこ淤斯呂おしそろ和気天皇の御子、名は倭男具那王やまとをくのみことぞ。おれ熊曾建二人、伏はず礼無しと聞し看して、おれを取殺れと詔りたまひて遣はせり」とのりたまひき。爾に其の熊曾建白まこととく、「信まことに然しかまさむ。西の方に吾二人を除きて、建く強き人無し。然るに大和国に吾二人に益えきりて建き男は坐しけり。是を以ちて吾御名を敵らむ。今より以後、倭建御子と称なづへまをすべし」とまをしき。是の事白し訖まへつれば、即ち熟瓜うすなはの如振り析ききて殺したまひき。故、其の時より御名を称へて倭建命と謂ふ。

◎建く荒き情の開花 父天皇の恐れたのは、小碓の勇猛な力もさることながら、その「建く荒き情」、すなわち人の本心を見抜き、知略

を用いて過激に対処してしまう性情であり、倫理、善悪を超越した神的同时というべき桁外れな資質だった。反逆者を容赦しない古代王権、とくに血で血を洗う英雄時代の王権は殊更に鋭角的で、小確のような桁外れな性情と資質をもつ統治者が渴望されていたろう。この点、心もことばも二重構造をとる景行天皇の性情と資質は、小確に劣り、優柔不断ともいえる。

しかしその反面、景行天皇は老獪な統治者ともいえ、この恐るべき性情と資質を持つ小確が自らの皇位を脅かすことを見抜いている。この力が外に向いている限り、皇位は安泰である。小確を遠征に従事させ、彼が勝つても敗れても、自分は統治者として君臨できる。景行天皇はそのように考えたろう。そして事実、景行記は「倭建命記」といえるほどに倭建の実績で貫かれ、景行天皇は黒幕の形でそれを冷徹に統括する者として君臨している。

こうして、景行天皇は小確を熊曾征討に遣わした。「熊曾」の「熊」とは南九州の熊の国(熊本県)の「熊」(球磨郡地方)を指し、「曾」(「襲」とも)とは大隅(鹿児島県)の始良郡を主に指している(その中心は現在の曾於市だらう)。この時の小確は、髪を額の上に結う、いわゆる「瓠花」という少年特有の髪のかい方をしていた(「瓠花」の具体的な形は不詳である)。景行紀によると、このとき一六歳だった。

小確の知略・怪力・猛々しい情は、熊曾征討でも見事に開花している。熊曾建の家の新築祝いの日、彼は「御衣御裳」を用いて「童女」少女に変身し、祝いに参列した。熊曾建はその美しさに魅了され、自分たちの間に待らせて盛んに酒宴を催した。そして、宴が最高潮に達した時に彼は突如二人を殺すという離れ業を演じる。特に弟建を殺害する方法が極めて荒々しい。そして、「倭建命(倭建御子)」という御名まで奉られている。

このように、日常的に用いる廁での殺害とは打って変わって、神が

来臨して人々も参集して弥栄を寿ぐ晴がましい祭りの場を選び、少年皇子が美少女に変身して性的な魅力を漂わせ、欲を極めている時に、一転して血塗れの残酷な殺しをてきぱきと行い、しかも倭建命(大和国の英雄という賛辞まで奉られている。小確には何の迷いも無駄もなく自らの道を華々しく突き進む鮮やかな展開で、あまりの変幻自在さにくるくるめく思いがする。見事という他ない。

### 二 熊曾征討物語の生成

◎熊曾征討物語の生成 さて、この熊曾征討物語は、どのようにして生成・形成されたのだろうか。そこには古代国家の形成期(英雄時代の論理があり、『古事記』・『日本書紀』の編纂された奈良朝の考え方もあるだろう。

『日本武尊』[上田正昭、一九七三、一一四頁]が説くように、今の場合、課題の焦点は次の三点に絞られるだろう。

- (I) 征討の日として新築祝いという晴の日が選ばれたのは、何を意味するか。
- (II) 叔母「倭比売命」の与えた「御衣御裳」を小確命が着たのは、何を意味するか。
- (III) 「小確命」から「倭男具那王(日本童男)」、「倭建命」へ変化(成長)するのは、何を意味するか。

◎祭式・儀礼の世界 そして『日本武尊』[上田、一九七三、一一七―一九頁]が説くように、これらの課題のほとんどは祝的な祭式・儀礼の世界にかなり収斂され、また『ヤマトタケル』[吉井、一九七七、

五四頁」が説くように、熊曾征討物語は「新嘗祭にかかわる新室ほぎの祝宴の場で、この場面のもつ観念を汲みあげながら成立し、伝承されてきた」ようである。

(I)は場の問題である。この新築祝いは「新嘗祭」・「成人戒」・「即位式」に通じている。そして、この祭祀儀礼は来訪する神に神女が「一夜妻」として奉仕する習俗を付随させ、この習俗を基盤にして神に相当する尊貴者に神女が一夜妻として奉仕することで政治的な服属を示す、いわゆる「色好み」をも付随させているようである。

また、(II)は神のアイテムの問題である。この「御衣御裳」の本来のあり方は、伊勢の神に奉仕する神女「倭比売命」の着る「神衣」であり、同時に神あるいはそれに相当する尊貴者の着る「神衣」でもあるようである。そして、この神衣は「一夜妻」の習俗や「色好み」の場から恋する男女が着る「恋衣」の様相も呈しているようである。

そして、以上の(I)(II)を踏まえて(III)で主人公の「小碓」・「倭男具那王」が登場し、「倭建命」＝大和国の英雄・天皇に即位しているようである。以下、(I)祭祀の場とそこにおける(II)聖なるアイテムに重点を置き、これらの装置のもとで(III)主人公が人格を変換させていることを述べる。

◎古伝承・古代史・沖繩の祭祀伝承 右の三点の課題を解く鍵は、同じ古代の伝承、古代史の成果、沖繩の民俗を援用して古代的世界を再現することにある。

とくに沖繩を中心にした祭祀伝承に注目したい。大和も琉球も共に王朝をもち、基層文化を共有している。大和朝廷と琉球王朝では確かに時代的な差異が大きく、最大千年の開きがある。しかし、社会状況には類似する点が多い。「亡滅の歌声」〔藤井貞和、一九七八、一六頁〕が説くように、古代文学の前史を埋めるのが、南島古謡の組織立った発掘と解明にある。沖繩は古代の鏡であるというのは、この意味で正しい。

## 四 彦を助ける姫

### 1 姫彦制

◎叔母の力 西征に向かう時、小碓命は叔母の倭比売から「御衣御裳」を賜っている。この衣は後に熊曾建を殺害する謀略の女装に用いられて効果を発揮しているから、威力ある衣裳だったとわかる。

二人の名がともに「倭」をもつのは、大和朝廷の「祭」と「政」の代表者であることを示している。この二人は協力して熊曾国と対抗している。ただし、熊曾征討後に「倭建命」になっているので、当初から「政」の代表になっていたわけではない。古代においては、政治的支配者と祭祀の権威者が兄妹で担当する、いわゆる祭政一致の体制が一般的だった。今の場合、叔母と甥の関係でいささか変則的ながら、身内の関係にあるので、原則を破っているわけではない。

◎姫彦制 このような祭政一致体制は、姫彦制ともいわれている。その代表は、大和朝廷における伊勢神宮の最高神女である齋宮と天皇である。その端的な具体例が倭比売と景行天皇である。また、大和国佐保地方の沙本毘売と沙本毘古(垂仁記)、宇佐地方の宇沙都比売・宇沙都比古(神武記)、阿蘇地方の阿蘇津媛・阿蘇都彦(景行紀)、播磨国飭摩郡の阿賀比売・阿賀比古(播磨国風土記)など、その例は多い。さらに古くは、邪馬台国の卑弥呼と男弟(魏志倭人伝)の例がある。

### 2 おなり神

◎おなり(姉妹)神 古代の鏡といわれる沖繩には、今も「おなり(姉妹)神」信仰が生きている。これは、姉妹のもつ霊能が兄弟を守ると

いう信仰である。このおなり神信仰は、家、一族、共同体、国の各レベルに存在する。首里王府における聞得大君と国王もまた、おなり神信仰に基づいた姫彦制の典型である。

◎旅の兄を加護するおなり神 この姉妹神の霊力は、兄弟が旅に出る時に特に発揮される。例えば、次のような伝承が各地にある。ある妹が夢で海上で遭難しかけた兄を懸命に救ったところ、後にそれが現実だったという。

「イザイホーと名付け「久高島」「崑山篤、二〇〇六a」によると、沖繩諸島の一つ・久高島には「女は神人、男は海人」という諺がある。この諺は島の男女の棲み分けを端的に表現し、同時にその円環的な繁栄の構図をも示している。すなわち、島のおなり神・神女たちは一年間のほとんどを旅にある一人前の男たちのために祈願していた。そして、旅から帰ってきた兄(弟)は、折をみておなり神に旅先で求めた布を贈り、おなり神はこの布で神衣装を新調したという。おなり神はこれを着てさらに兄(弟)の成功を祈禱したろう。

また、「正月綱と爬龍船漕ぎ「黒島」「崑山、二〇〇六f」によると、八重山群島の一つ・黒島に、次のような御嶽の由来譚がある。「御嶽」とは本土の神社に相当する。なお、八重山では「おなり神」のことを「ぶなり神」という。北神山御嶽の場合、氏子の船道氏の祖先が王府所有の船・親鷲の舟子に選ばれ、那覇との間を往復した。そのぶなり神(妹)が渡海安全を祈願し、兄の勤務成績がよく、八重山の蔵元から船道の姓を贈られた。南神山御嶽の場合、氏子の大浜家の祖先が王府の舟子として那覇に上る時、南洋に漂流した。しかし、そのぶなり神(妹)が兄の渡海安全を祈願し、唐の保護の下に帰島できた。御神体は兄が唐で求めた宝鏡である。

いずれも旅にある兄の無事をぶなり神(妹)が祈っており、その霊威の強さが一族の尊崇を集め、その信仰は共同体レベルに達している。

とくに大浜氏がぶなり神の加護によって成功し、旅先で得た呪物が宝鏡であるのは、注目すべきである。この宝鏡は御嶽のご神体になり、その神威とぶなり神の祈禱によってさらに渡海安全が保証されたろう。

◎白鳥 次の琉歌は、おなり神が白鳥に変身して海上の旅にある兄弟を守護している、と述べている。琉歌とは琉球の歌の意で、奄美・沖繩に伝承される抒情的な歌謡である。普通は三線に乗せて歌い、多くは踊りに結びついている。以下の琉歌の引用は、『琉歌全集』「島袋盛敏・翁長俊郎、一九七七」による。

白鳥節

お船のたかともに

白鳥がみちやうん

白鳥があらぬ思姉おすじ

お船の柱の上に  
白鳥がとまっている。

いやあれは白鳥ではなく姉の霊神なのだ。

◎蝶 次の「おもろ」は、おなり神が蝶に化身して兄弟を守護する例である。「おもろ」を収載する『おもろさうし』は首里王府の編纂した古謡集で、一巻は一五三一年に、二巻は一六二二年に、全三十二巻は一六二三年に完成している。「おもろ」は祭りにおける神にかかわることばに発し、その主題は王府の祭祀、王や按司(地方領主)の賛美、天体賛美、航海、造船、築城、貢租、交易、出陣などに及んでいる。以下のおもろの引用は、『おもろさうし』「外間守善・西郷信綱、一九七二」による。

一 すがなりがふなやれの節  
あがおなり御神の  
まぶ 守らて、おわちやむ

やれ えけ

又 弟おなり御神の  
 又 綾蝶 成りよわちへ  
 又 奇せ蝶 成りよわちへ

(おもろさうし・十三・船ゑとのおもろ御さうし・965)

歌意は、吾がおなり(姉妹)御神が守ろうといつていらつしやつた、弟おなり御神が美しき蝶・奇しき蝶に成り給いて(化身し給いて)、守ろうといつていらつしやつた、ということである。

「おもろ概論」外間守善、一九七二、五三九頁によると、卷十三の「船ゑとのおもろ御さうし」は帆走の歌謡で、一五世紀の後期から一六世紀の初頭にかけて栄えた琉球の海外貿易で、琉球王国の人びとが「南方海上を疾駆し、或は東シナ海を帆走し、南方の国々と中国、日本、朝鮮を結ぶ中継貿易で精力的に行動していた時代に謡われたものである」。こうしてみるとこの歌謡は、おなり神たちが美しい蝶に化身して帆船を疾駆させる船人たちの渡海安全を守護しているとわかる。

◎松金と蝶 現在でも沖縄の祭りで、おなり神、神女が蝶になって旅する男子を守護するという神歌・古謡を歌っている。沖縄諸島の一つ・粟国島で旧暦六月(以下の年中行事の月日は旧暦)に催されるヤガン折目(粟の収穫祭)で、島の神女たちは「茶碗殿松金」と「大和旅」を歌う。引用は、『南島歌謡大成 I 沖縄篇上「外間守善・玉城政美、一九八〇、四五三・四一二頁」による。なお、Cの原典は題名を「茶碗取まちがに」としているものの、詞章は「大和旅」である。

茶碗殿松金

A一 ちゃわんとんまちがにや  
 二 いちち生りやてさみ

チャワントン松金は

意地気生まれであるから

- |    |                  |                   |
|----|------------------|-------------------|
| 三  | かしち生りやてさみ        | かしち生まれであるから       |
| 四  | いちちぐわーば なちよーて    | 意地気子を産しておいで       |
| 五  | かしちぐわーば なちよて     | かしち子を産しておいて       |
| 六  | みふにふさ ていーちふさ     | 御船を欲しい 一つ欲しい      |
| 七  | いじゆく欲さ ていーち欲さ    | いじゆく(船)欲しい 一つ欲しい  |
| 八  | 御船 はじきたり         | 御船を接いで上げた         |
| 九  | いじゆく はじきたり       | いじゆくを接いで上げた       |
| B二 | 大和旅 でーぬぶら        | 大和旅 さあ上ろう         |
| 二  | やしる旅 でーぬぶら       | 山城旅 さあ上ろう         |
| 三  | みがにこーて でーぬぶら     | 新金を買って さあ上ろう      |
| 三  | てだまこーて でー戻ら      | 手玉を買って さあ戻ろう      |
| 四  | ぬぶてから でー戻ら       | 上つてから さあ戻ろう       |
| 五  | ぬぶてから でーかじか      | 上つてから さあ退こう       |
| C一 | 大和旅              |                   |
| 一  | ひー やまとたび でーぬぶら   | ひー 大和旅 さあ上ろう      |
| 二  | ひー やしるたび でーぬぶら   | ひー 山城旅 さあ上ろう      |
| 三  | ひー ふちん こーてくいゆんどー | ひー ふちん(鬘)を買ってやるよ  |
| 四  | ひー うちゆぶ こてくいゆんどー | ひー 打ち呼ぶ(鬘)を買ってやるよ |
| 五  | まーた やまとたび でーもどら  | 又 大和旅 さあ戻ろう       |
| 六  | しやらやーふはてるめー      | シヤラヤーフハテルメー       |
| 七  | まーた うちゆぶこて でーもどら | 又 打ち呼ぶを買って さあ戻ろう  |
| 八  | しらふやふはてるめー       | シラフヤフハテルメー        |
| 九  | まだまこて でーもどら      | 真玉を買って さあ戻ろう      |
| 一〇 | しらふやふはべる         | シラフヤフハベル          |
| 二  | まーた むどいばぬ うるししやや | 又 戻る際の嬉しさは        |
| 三  | しらふやーふ           | シラフヤーフ            |
| 三  | まーた しゆどちばぬ なぐさみや | 又 退く際の慰めは         |

一四 しらふやーふ

シラフヤーフ

◎旅の男を守護する神女

「ヤガン折目〔粟国島〕」「畠山、二〇〇六e」によると、「茶碗殿松金」は島に富をもたらす男子で、粟国島の男子の理想像になっている。勇氣と賢明を兼備する松金は自分で船を造り上げ(A)、日本に旅して貴重品を入手して島に戻ろうとする(B)。次いで、日本に上り、鼓・真玉などの祭具を入手して島に戻ろうとし、旅の安全を祈願している(C)。この祭具は、久高島の海の男が旅先で求めた神衣装の料と大浜家が旅先で得た宝鏡に相当している。シラフヤーフは「白帆弥帆」で松金の乗る船が順風を孕む様子であり、ハベ(テ)ルメーは蝶の敬称「蝶前」で旅の安全を図る霊的存在である。松金はAでは三人称で歌われ、B・Cになると松金が一人称で歌い出し、そしてCの後半では神女たちの祈りの文句が入ってくる。すなわち、神女たちが松金の物語を歌っているうちに、松金自身が歌い出し、そして神女たちが松金の旅の安全を祈願するという構造になっている。こうしてみると、松金は男子の出世した理想像ということになる。

◎男女による円環的な繁栄

しかし、この神歌にはこれで終わらない仕掛けがある。それはAの四・五において、松金が自分とそっくりな勇氣と賢明を兼備する男の子を産んでいることである。したがってこの条以後、船に乗って富を得て島に戻るのが、松金か男の子かが判然としない。しかしこれは、意図的に父子を重ね合わせているだろう。男の子は松金の後継者であり、島の男の子たちが皆それに該当している。島に富をもたらす松金は決して過去の成功者ではなく、常にその再来・後継者としてその出現が求められている。そして、神女たちが蝶になってこの島に富をもたらす理想的な男子を守護している。このように祭祀世界の神女と俗的世界の男との関係は、円環的に島の繁栄

を導くことになる。この神歌は、永続的に続く共同体社会の男子の理想的な生き方を予祝的に描いている。

◎大城クエーナ

次に、シヌグで歌われる神歌・古謡を挙げる。沖縄諸島の北半分の地域に分布する七月の年中行事・シヌグは夏正月の一つで、この他にもいろいろな性格をもっている。そのうちの一つが、男子の健やかな成長と栄達を祝福し、成人になったばかりの若々しい性を行使して豊饒を産み出すことである。とくに伊平屋島田名ではシヌグを「男児祭」と表記し、男の子(一歳児から三歳児)の健康祝い、出世祝い、性の行使による豊饒を主題にしている。

この祭りでもとくに注目したいのは、祭りの最終日の夕方、社殿に神女を中心とした神人たちが集合して歌う「大城グワイナ」である。「大城グワイナ」は普通「大城クエーナ」という。クエーナとは歌謡の形態の名で、対句形式を基本にした叙事歌謡である。引用は、『南島歌謡大成 Ⅰ沖繩篇上』「外間・玉城、一九八〇、二四三・二四四頁」による。

大城グワイナ

- A一 大城がいらいわいな  
 二 天城仕立な  
 三 勝連のあまひが  
 四 勝連のあまじやらが  
 五 大和から下たる  
 六 やしるから下たる  
 七 石ゆちはこのなひ  
 八 金ゆちはこのなひ  
 九 石ゆちは寄せてくを  
 二 金ゆちは寄てくを
- 大城を造りなざったことよ  
 天城を仕立てられたことよ  
 勝連のアマヒ(阿麻和利)が  
 勝連のアマジヤラが  
 大和から下った  
 山城から下った  
 石斧を企んで  
 金斧を企んで  
 石斧を寄せて来い  
 金斧を寄せて来い

- 二 石なごはわり取て 石な子(石)を割り取つて
- 三 赤なごはわり取て 赤な子(石)を割り取つて
- 三 石なごはふり取て 石な子を掘り取つて
- 四 赤なごはふり取て 赤な子を掘り取つて
- 五 いち、思子生らち 意地氣思ひ子を生まらせて
- 六 いち、思子すだしやひ 意地氣思ひ子を躰<sup>す</sup>だして
- 七 乗馬は仕立てやひ 乗り馬を仕立てて
- 八 立馬は仕立てやひ 立て馬を仕立てて
- 九 乗馬は寄てくを 乗り馬を寄せて来い
- 一〇 立馬は寄てくを 立て馬を寄せて来い
- 一一 かぬち鞍仕立やひ 唐木鞍を仕立てて
- 一二 桑木鞍仕立やひ 桑木鞍を仕立てて
- 一三 いつだん繩打ち掛けて 糸(立派な)手綱を打ち掛けて
- 一四 芭蕉だん繩打ち掛けて 芭蕉手綱を打ち掛けて
- 一五 しんざこんざ打ちおそて しんざこんざ打ち添つて
- 一六 引き腸帶引き責て 引き腹帯を引き締めて
- 一七 ざらひとに引き責て ざらひとに引き締めて
- 一八 ざらひとに打ち乗て ざらひとに打ち乗せて
- 一九 島廻り廻やひ 島回りを回つて
- 二〇 国廻り廻やひ 国回りを回つて
- 二一 お万人ゆ寄てくを 御真人を寄せて来い
- 二二 つわ者ゆ寄てくを 強者を寄せて来い
- 二三 みやまぐちのりくまひ 深山口に乗り込んで
- 二四 深山そのりくまひ 深山底に乗り込んで
- 二五 大木もとさとやひ 大木本を悟つて
- 二六 高木もとさとやひ 高木本を悟つて
- 二七 大木もとねがやひ 大木本の根を刈つて
- 二八 高木そらはんちくを 高木梢を離して来い
- 二九 藁三つみくんちやひ 藁三積みを括<sup>く</sup>つて
- 三〇 御万人ゆ寄てくを 御真人を寄せて来い
- 三一 うつたてゆ寄てくを うつたてを寄せて来い
- 三二 深山口引きおるち 深山口に引き降ろして
- 三三 大兼久持ちおるち 大兼久に持ち降ろして
- 三四 しらびにやの真中 躰らべ(美しい)庭の真中
- 三五 しらびにやのはたまで 躰らべ庭の端まで
- 三六 目金細工寄てくを 目金(目利き)細工を寄せて来い
- 三七 手ごま細工寄てくを 手細細工を寄せて来い
- 三八 よそば斧寄てくを 四側斧を寄せて来い
- 三九 八そばてぬ寄てくを 八側手斧を寄せて来い
- 四〇 白繩打ちはけて 白繩を打ち掛けて
- 四一 黒繩はん打ちはんち 黒繩も打ち撥ねて
- 四二 よそば取りとやがいれ 四側取りを取り上げよ
- 四三 八そば取りとやがいれ 八側取りを取り上げよ
- 四四 花木植付て 花木を植え付けて
- 四五 真九年母も植付て 真九年母も植え付けて
- 四六 今どみいつちやびる 今こそ萌え付きます
- 四七 今と花咲ちやびる 今こそ花が咲きます
- 四八 今となひづちやびる 今こそ実が付きます
- 四九 今どうめふれたる 今こそ熟みました
- 五〇 御主人のみやらべが 三十衣の女童(乙女)が
- 五一 はたちのみやらべが 二十衣の女童が
- 五二 隠れ盛もやげやひ 隠れ挽ぎに挽ぎ上げて
- 五三 盗み盛りもやげやひ 盗み挽ぎに挽ぎ上げて
- 五四 御ふつくる盛くで 御懐に挽ぎ込んで

空 御袖まで盛り  
御袖まで挽ぎ込んで

六 赤紙におけやひ  
赤紙に受けて

七 白紙におきけて  
白紙に置いて

八 我首里加那志御目掛けて  
我が首里加那志の御目に掛けて

九 思子までの見かけて  
思いにまで御目に掛けて

十 伊平屋のろにおしやげて  
伊平屋祝女に押し上げて

十一 きちやのろにおしやげら  
喜界祝女に押し上げよう

◎船作りか城作りか 「伊平屋島田名のウンジャミ・シヌグの神歌」

「中鉢良護、一九九七」によると、この神歌は首里・那覇で流布した、公用船で旅立ちした者への呪的歌謡「大城こわいにや」が原歌である。すなわち、聖なる九年母（柑橘類）の実が熟してこれを王城に捧げて祝福し、その残りを旅にいる者に賜り、それによって無事帰還して長寿が間違いない、と呪祝するものだった。ところが、田名に導入されると「船作り」歌謡に変わり、ノロへの祝福歌に変容したという。このように、九年母による渡海安全や船作りを主題にし、神女たちを崇める点で、「茶碗殿松金」と「大和旅」に通底するものがある。

しかし、中鉢がいうように渡海安全の呪祝歌がこの歌謡の原歌であったとしても、「シヌグのチョンジャマ（トンザマ）」「伊平屋島」「崑山、二〇〇六d」が説くように田名に導入されると「城作り」歌謡に変容した、と見るべきだろう。すなわち、男児の健康・出世を祝福するシヌグにおいて一代の英雄・阿麻和利を主人公にする神歌を歌うことで、阿麻和利に託して共同体に富をもたらす男の子の理想的な生き方を描いてみせた、と考えられる。

◎英雄阿麻和利 民間伝承や『おもろさうし』によると、「阿麻和利」は沖縄本島中部に勝連城を作った覇を競った英雄で、人望も知恵もあつた。次のおもろは、その阿麻和利を賛美する一例である。

おらおそい節

一 勝連の阿麻和利

聞え阿麻和利や

又 大国の鳴響み

肝高の阿麻和利

（おもろさうし・十六・勝連具志川おもろの御さうし・1141）

歌意は、勝連の阿麻和利、名高い阿麻和利、気高い阿麻和利は、大国の鳴響み按司（地方領主）である、ということである。

◎男の出世 「大城クエーナ」は、A・Bの二段構成を取っている。

まず一二で、立派な城作りが完成したとAの主題を提示する。「阿麻和利」は、大和製の斧で城作りに着手する。見事な馬に颯爽と乗って支配地を巡り、屈強な人々を召集する。彼らは、山に入って立派な木材を伐り出す。ここで名工が召集され、建築物を作る。このように栄華への道程は順調で、九年母（真九年母）の結実によって城は大城になり、栄華の極まりに至る（A）。

◎神女への献上 城作りの完成が九年母の繁栄によって結ばれるのは、これが霊物・呪物だからである。この柑橘類は垂仁記の多遲摩毛

理伝承にあるように、海上遥かにある「時じくの香の木の実」で、不老長寿の効験がある、と信じられている。沖縄でも、富・生命・力の充満する楽土の果物として珍重されている。

そして、見事に実った霊物を少女がもぎ取って国王などに見せ、最後に田名の最高神女の伊平屋ノロ（喜界ノロは伊平屋ノロの対語。両者が親交を結んだという伝承による）などに献上する（B）。このように、この九年母には阿麻和利の霊力が籠もっており、これが神女たちに奉獻されている。

◎**神女への還元** この神歌は、阿麻和利が大成し、その霊力を神女たちに奉獻することだけを述べ、阿麻和利が神女たちの霊的な援助を受けて大成したとは述べていない。しかし、この男児祭は神女たちによって男児の成長・成功を祈願するものである。また、神歌は場に支えられて機能するもので、必ずしも主題を完結して表現するとは限っていない。とすると、この祭りの場の主題と大城クエーナが補充し合っている、この神歌の主題は神女たちが阿麻和利の大成を守護したので、その謝礼として阿麻和利が霊物を神女に還元したことを述べている、と理解できよう。

こうしてみると、この霊物・九年母は久高島の海人がおなり神に贈った神衣装の料、黒島の大浜家の男がぶなり神に献上した宝鏡、松金が神女たちにもたらした鼓・真玉などの祭具に相当し、これを共同体にもたらした阿麻和利も久高島の海人、大浜家の男や松金と同様に男子の出世した理想像ということになる。

◎**男女のリンクによる繁栄** この神歌にもこれで終わらない仕掛けがある。それは一五・一六において、阿麻和利が自分とそっくりな立派な男の子を産んでいることである。したがってこの条以後、城作りを大成するのが、阿麻和利か男の子かが判然としない。しかしこれも、意図的に父子を重ね合わせられ、男の子は阿麻和利の再来・分子であり、島の男の子たちは皆それに該当している。

伊平屋ノ口に還元された阿麻和利の九年母は、かつて次世代の男の子に与えられ、その成長・出世のために投資されよう。そのあり方は、首里・那覇で流布した原歌「大城こわいにゃ」が、王城に捧げて祝福した残りの九年母を旅に行く男に贈ってその成功を祈禱するあり方と同じである。こうして、霊力は神女から俗的世界の男の子に分配され、その男のなかから出世した者がさらに強化した霊力を神女へ還元する。このように、男の現実世界における働きと女の宗教的な働き

が円環的にリンクして共同体の繁栄を紡ぎ出すことになる。

◎**海彼の幸をもたらすように望まれる男子** また沖縄の正月と夏正月では、男児祭に限らず一人前の男性に拡大された形で、島の男性が旅に出て海彼の幸をもたらすように神女たちによって祈願されている。例えば「正月の神人の婚(久高島・野甫島)」「畠山、二〇〇六c」によると、久高島の正月ではガチントフェーナギーキという進水式の神歌を神女たちが歌い、伊平屋列島の一つ・野甫島の八月正月(夏正月の一つ)では「道連ねの歌」という神歌を神女たちが歌い、いずれも男たちが旅に出て海彼の幸や呪物を島にもたらすように祈願している。

◎**兄弟の旅とおなりの手巾** また兄弟が旅に出る時、姉妹が手巾(御巾とも)あるいは髪の毛などを兄弟のお守りとして手渡し、兄弟の旅の安全・成功を祈願している。次の琉歌は、この習俗の意味を端的に述べている。

賀頌

思姉のみさじ

姉上の下さったお手拭は

守神だいのもの

守神だから、

引き廻ちたばうれ

大和までもどうぞ無事な旅行ができますように

大和までも

引き回して下さい。

この歌を「賀頌」に分類するのは、姉妹の持ち物に籠もる霊力が兄弟を守護すると祝福しているからである。

◎**男女の協力** 以上、沖縄の事例をみると、日常あるいは晴の日に家や共同体に富をもたらすために男子が旅に出、その旅が成功するようにおなり神、神女が祈願するのみならず、時には霊的なものに化身して守護し、時には霊物・アイテムを与えて守護している。こうしておなり(姉妹)神・神女の援助によって兄弟や共同体の男子から成功

者が輩出するように望まれている。そして成功した男子は、おなり神・神女になんらかの新たな霊物・アイテムを奉っている。

### 3 神的な少年皇族と青年皇族將軍

◎望まれる英雄 沖繩・南島におけるこのような男女の協力体制は、大和朝廷の版図拡大・繁栄を図るために非凡な才能をもった小碓命が「西征し、その事業が成功するように伊勢神宮の倭比売が「御衣御裳」を与えて守護するあり方と共通している。しかも、倭比売から宗教的な援助を受けた倭建が、取り敢えず熊曾征討という所期の目的を達している。こうしてみると、少年皇族の一人・小碓は、叔母（おなり神の変形）・神女の霊的な援助によって「倭建命」＝大和国の英雄に成長・脱皮している、と理解される。（ただし大局的に見ると、倭建は途中で挫折し、倭比売に霊物を奉る域に達していない）。

◎伊勢神威譚 したがって、この熊曾征討物語は伊勢神威譚で、『古事記伝』〔大野晋、一九六九、一九七頁〕が次のように述べているとおりである。

此比賣命の御衣御裳をしも、請し賜はり賜ふ所以は、倭比賣命は、伊勢大御神の、御杖代と坐ませば、其御威御靈を假賜はむの御心なりけむかし、【若然らずは、女人の衣服なりとも、新に裁縫てこそ用ひたまふべけれ、遙々に伊勢まで申し請たまふべきに非ず、】

倭比売は伊勢の神を祭る神女なので、彼女の賜う「御衣御裳」に伊勢の神の御霊が籠もっているという。もしそうでないなら、わざわざ伊勢までこれを貰いに行く意味がないと説いている。とすると、歴史

家が説くように伊勢神宮の尊崇が飛躍的に高まるのは壬申の乱（六七二年）以後の天武朝とすれば、この頃に現伝承が完成したことになる。

しかし、沖繩の神歌の事例からすると、それ以前に小碓が叔母から「御衣御裳」を貰って軍旅に出たという話柄があった、と想定される。

◎神的な少年皇族 しかし、話はもう少し複雑である。小碓は自らを熊曾建に名乗る時に、「倭男具那王」と称している。景行紀によると「日本童男」と表記し、一六歳だったと伝えるから、「男具那」は「童男」に等しく、成人する年頃の少年だった。

倭建の物語は、大和朝廷の拡大に尽力した数々の青年皇族將軍の軍旅の伝承が集積したものでろう、といわれている。しかし、倭建命＝大和国の青年皇族將軍の前身が「倭童男王」を称しているのが、大和国を代表する「童男王」は神的な恐るべき少年皇族の謂になるだろう。この「倭童男王」の称は他国を意識した尊称で、「小碓」は当初はこの「倭童男王」になるべき候補者の一人だったろう。それが、猛々しい兄王殺しによって「倭童男王」になった、と考えられる。

このように大和国を代表する「倭童男王」がいるということは、他国においても同様の「童男王」あるいはそれに類する者がいたことを想定させる。例えば、「熊曾建」の前身として「熊曾童男王」が、「出雲建」の前身として「出雲童男王」がいた、と考えられる。英雄時代はこうして醸成されてきたのではなからうか。

◎神秘的な力が宿る「童」 「倭童男王」が神的な恐るべき少年皇族の称号となりうる根拠は、他にも求められる。記・紀をみると、「童」の用字は当然ながら成人以前の少年少女を意味しているけれども、同時に尋常ならざる存在にもなっている。「ヤマトタケル物語形成に関する一試案」〔吉井、一九七五〕が記紀の「童」の用例を列記し、その存在意義を的確にまとめている。

まず神代紀上の山上草木・月日の誕生の条で、海神は「少童」、神武紀で「海童」と表記されている。また垂仁紀二年の条で、「比賣語曾社」由来譚の主神は「白き石」で、「其の神石、美麗き童女に化りぬ」と記されている。また神代紀上の八俣大蛇退治の条で、奇稲田姫は「童女」、「少童」、「少女」、神代記で「童女」と記されている。この奇稲田姫は神女である。また崇神紀十年の条で、大彥命に謀反を暗示する歌（日本書紀歌謡18。以下、日本書紀歌謡を紀歌謡と略称）を歌って姿を消した「少女」は、「童女」とも記されている。また雄略記の条で、雄略天皇が婚した吉野の「童女」は、神仙境における神女の面影をもっている。また、吉井が指摘していないけれども同じ雄略記の条では、雄略天皇が婚を約束した「童女」の赤猪子は三輪氏の神女である。また雄略紀元年の条で、雄略天皇が一夜召しただけで孕み天皇を驚かした采女は、「童女君」と記されている。また皇極紀三年の条には、宇陀の郡の押坂直が「童子」と共に紫の茸を食べ、無病にして長命した、と記されている。以上から、童形の者には神秘的な力が宿る、と考えていたとわかる。すなわち、童形の者は神威に感応し、超人的な霊力を発揮するという発想を根強くもっていた。

そしてこの他の用例として、倭建の「倭童男王」・「童女」（女装）と雄略天皇の「童男」がある。

なお、顕宗天皇（袁祁王）と清寧天皇（意祁王）には「童」の字は用いられていないけれども、その即位以前はそれぞれ「小子」・「少子」（清寧記）、「小子」（顕宗前紀）と記されているので、「童」に準じられよう（五で後述）。

◎超能力美少年 童形の者が神的な力を発揮するという考え方が民俗に底流する心性であることを示す好例として、次の近世の事例を挙げる。「江戸市民と歌舞伎」「西山松之助、一九七九、一七八・一七九頁」は、江戸歌舞伎の荒事の主人公が超能力美少年で、江戸時代の市川團

十郎たちの襲名が美少年時代だったことを述べ、「美少年市川團十郎の登場は、俠気的美を神人感合の超人的霊力によって発動させる日本的発想を根源として成立した」と述べている。そして、その日本的発想を示す次のような大暴動事件が天明期にあった、と述べている。

天明の江戸打ちこわしの大暴動が起こったとき、数十人の打ちこわしの人の中に、美少年一人と大入道二人が混じっていて、少年は飛鳥の如く、入道は金剛力士の如く振舞った。これは、暴神が顕形したものであろう、と、いろいろな書に記されている。ここでも世直しの先頭に美少年が立ち、神の出現だと見られている。

そしてまた、キリスト教徒たちを率いて超人的な威力を発揮した美少年・天草四郎時貞の事例も挙げている。

このような世直しの超能力美少年は大和の英雄・倭建と通底している、と理解される。

◎大長谷若建命は倭建命の再来 倭建命と同様に「童男」時代に神秘的な力を発揮する恐るべき少年皇族として、雄略天皇（大長谷若建命）を挙げられる。

安康天皇が七歳の目弱王に殺害されるという事件が起きた。この時、「童男」だった大長谷若建は、父・安康天皇殺害に対して煮え切らない態度をとる二人の兄王（黒日子・白日子）の「杵を握りて挖き出でて」太刀や穴埋めで殺害するなどし、次いで目弱王を討伐している。それに引き続き、有力な皇位継承候補の忍歯王を殺害する。大長谷若建と忍歯の両王は、早朝に馬に乗って出かける。この時、大長谷若建は「衣の中に甲を服し」、弓矢を持って武装した。そして、「儼忽の間に、馬より往き双びて、矢を抜き、其の忍歯王を射落し、乃ち亦其の身を

切り、馬楯うまぶねに入れて土つちと等しく埋うづみたまひき」。この騙し討ちは何の迷いもなく手早く行われ、忍菌しのぐみの身体を切つて飼かい葉桶はづくに入れて地面と同じ高さたかさに埋めてある。これは王族はおろか人並みの葬り方もせず、無残むざんに捨てていることを意味している。ここの「童男わうなん」も、正に神秘的な力を發揮する恐るべき少年皇族だった。やがて即位した雄略天皇は古代的な英雄の典型になり、神的な勇猛さを發揮するに至る。

これに対して景行朝の小碓おとも、兄王あにみこ(大碓命)殺害では「朝曙あさけに廁みに入りし時、待ち捕つかへて搦なみ批ひきて、其その枝えだを引き闕かきて、薦こもに褻つみて投げ棄うて」、尋常ならざる力量を認められて倭童男王やまとをんのみこ・大和国の神的な少年皇族になる。そして、熊曾征討で熊曾建の「衣ころもの衿くびを取りて」剣で殺害するなどして見事に初陣を飾り、倭建命・大和国の青年皇族将軍に成長していた。

このように、二人は「童男わうなん」の時にはほぼ同様な神的な勇猛な力を發揮し、「建たけ」の名を共有している。この共通項は、倭建命と雄略天皇の緊密な関係を窺うかがわせる。

こうしてみると、「長谷朝倉宮はつせあさくらのみや」(奈良県桜井市初瀬町)を都にした雄略天皇の事績として伝承される三重の采女みへの天皇みかど贊美の歌謡(古事記歌謡100。以下、古事記歌謡を記歌謡と略称)に、倭建が熊曾建に誇らかに名乗つた景行天皇の都「纏向まとむきの日代ひしろの宮みや」が、雄略天皇の都として登場する混同・矛盾も、雄略天皇・倭建命ということでは解けるかもしれない。怒りやすい雄略天皇(大長谷若建命)は三重の采女を「打ち伏せ、刀たちを以ちて其の頸くびに刺あけて、斬あらむ」とし、怒れる「倭建命やまとたけのみこと」も「熊曾くまその衣ころもの衿くびを取りて、剣を其の胸より刺し通し」ている。この三重の采女の伝承の男主人公は、英雄時代の大和朝廷の典型的な英雄であるならば雄略天皇または倭建命のいずれでもよかつたのではなからうか。

◎英雄の時代とその子孫の時代　しかし、その両者には自ずから区

別がある。「ヤマトタケルの物語」(西郷、一九八九、二四二～二四五頁)は、「古事記」上・中・下三巻を「神々の時代」・「英雄の時代」・「その子孫の時代」と位置付け、英雄の時代は半ば神話で無時間的祭式の世界であり、次第に人の世へと続く過渡期だと述べる。この点でも、倭建は英雄であり、雄略天皇はその子孫・再来だ、といえよう。

そのモデルは沖繩にあり、沖繩の祭式における男子の理想像と現実世界におけるその後継者・分子に相当する。沖繩の神歌式でいえば、雄略天皇は松金や阿麻和利の後継者・分子だった。

◎青年皇族将軍　大和国の神的な「倭男やまとをく具那な」・「倭童男やまとをんのみこ」・少年皇族が初陣での勝利によって「倭建命」の称号を獲得するというのは、初陣に少年から青年に切り変わる成人戒せい的な人格変更の性格があることを思わせる。したがって、その少年皇族の初陣が新築祝いという晴の場であることは、注目される(五で後述)。

こうしてみると、「大長谷若建命おほほつせわかひらたけのみこと」もまた、「童男わうなん」が天皇不在時の初陣で得た青年皇族将軍の名称を思わせ、成人戒せい的な人格変更の性格があることを思わせる。

そして、「ヤマトタケルの物語」(西郷、一九八九、二四五頁)が次のように述べているのは、正鵠せいこくを射ていよう。

ヤマトタケルをたんに(皇族将軍)といった概念でとらえようとするのは、明らかに不十分である。探求さるべきは、貴族社会の成年式、そのもつ軍事的・戦士の意義ではないか。

このように、民俗社会の成人戒せいを基盤にしながらも、そこから脱却した英雄時代の貴族社会の成人戒せいを想定しなければならぬだろう。

## 五 新嘗祭・成人戒・即位式

### 1 御名献上

#### ◎称号の授与

熊曾征討物語の骨格は、大和朝廷形成期Ⅱ英雄時代を背景にした大和国の少年皇族が、敵国の首領から「倭建命」という御名・称号を献上されたことである。

通常、名は上位者・権威者から下位者に与えられるものである。常識で考えると、敗者が勝者に自分の名前の一部である「建」を献上するというのは、不審なことである。しかし、小碓・倭男具那にとつて偽りの服属の場だったにしろ、この儀礼の主催者・祭主は熊曾建で、大和の少年皇族はその下位にあつた。したがって、当初の儀礼の場からみると、「倭建命」の称号は上位者から授与されたといえる。

また、この初陣に成人戒的な性格があると想定すると、与えられた課題を智恵と力を結集して克服した少年が、成人社会の代表者から称讃され、めでたく大人社会に仲間入りする図を描ける。成人戒では課題を出した長老が熊曾建のように殺されるわけではないけれども、一人立ちとは親離れであり、精神的には一種の親(父)殺し・大人殺しである。

#### ◎期待される英雄の誕生

とくに支配階層が戦闘に明け暮れた英雄時代にあつては、貴族の子弟が成人することは戦士になることでもあつたろう。

とりわけその戦士たちを統率して軍政を執る皇族青年将軍は、その戦士たちのシンボルであり、その成人戒で英雄の誕生が期待されたのではなからうか。この点、熊曾征討物語には、英雄時代の貴族社会における成人戒に軍事的・戦士の性格がある。そして、この成人戒を基盤にしてしかるべき権威ある立場の者から「建」・英雄という尊称を

授けられることが、天皇の即位資格儀礼だったとさえ考えられる。

#### ◎大國主神の根國訪問

しかるべき権威者から尊称を与えられた者が王位に就く好例として、神代記の「大國主神」の伝承がある。大穴牟遲神(大國主神になる以前の名)が兄弟の八十神たちの課した試練(火攻めや木攻め)に耐えようとするのは、成人戒の習俗を反映している。そしてこの後、須佐之男命の領する根國に行き、さらに厳しい試練(蛇・百足・蜂の室で寝ること、野火の中で鳴鏑を探すこと、須佐之男の髪に潜む百足を除くこと)を須佐之男の娘・須勢理毘売の援助によつて克服し、遂には課題を出し続けた須佐之男の意表をついて呪物(生大刀・生弓矢・天の沼琴)と愛する毘売を手中にして見事に逃亡する。この時、裏をかかれた須佐之男は、「お前がもつ生大刀と生弓矢で兄弟たちを支配し、また大國主神になれ」と名前を与え、祝福している。そして、その後はこの予祝どおり、兄弟の八十神を統治し、各地の最高神女を妻訪ういわゆる「色好み」を実践して、名実ともに出雲国の偉大な王・「大國主神」になっている。

#### ◎王になる資格授与の伝承

根國訪問は、出雲国の王になる資格授与の伝承だといわれている。大穴牟遲が神の国から与えられた武器と神器を用いて出雲国を統一する点は、伊勢国の齋宮から「御衣御裳」という霊物・アイテムを用いて熊曾を討伐したことと共通している。そして、異界・異国の神・首領が、裏をかくて自らを凌ぐ勢いのある若者に尊称・賛辞を与え、予祝している点が、熊曾建と倭建のあり方に通じている。また、倭建のその後も征討と色好みを実践し、大國主の歩んだ道程と共通している。

名前の変更は人格の更新であり、今の場合、「倭建」Ⅱ大和国の英雄・王(統治者)になることを示している。「倭建」は、「倭比売」と対になって大和国を統治できる存在でもある。

#### ◎天皇扱いされる倭建命

倭建の伝承には、彼を天皇扱いする記述

が多い。「倭建の命は天皇か」「福田良輔、一九六四」によると、常陸国風土記・阿波国風土記逸文に「倭武天皇」あるいは「倭武天皇命」と記述されていること、記紀における敬語法とその用字法(御・后・崩など)に注目し、倭建命≡天皇説を唱えている。

また「ヤマトタケル物語形成に関する一試案」(吉井、一九七五)によると、紀の編輯の方針として一代の御記のなかで天皇だけが系譜的記述をし、皇孫以下は系譜的記述をしないことになっているのに、日本武尊だけがこの方針を破っているという。そして、この疑問に答えられるのは、倭建命≡天皇説しかないという。

また、歴代の天皇の葬儀に歌う「大御葬歌」四首が倭建の葬儀に由来するという景行記の伝承も、倭建命≡天皇説を裏付けている、と考えられている。

◎**天皇扱いされない倭建命** しかし、倭建は伊勢の神から霊物(御衣御裳・草薙の剣と火打ち石)を与えられ、異界・異国の首領から尊称を与えられて将来を予祝され、征討と色好みを実践するものの、伊吹山の山神の退治に失敗してからは彷徨状態を呈し、都のある大和国に凱旋できていない。このように大和国に帰還できない倭建(大和の英雄)は大和の天皇でありえない、という考え方が有力になってもおかしくなろう。すなわち、大穴牟遲が遂に「大國主命」に大成したのに対して、小碓・倭男具那は「倭建命」の名前のおりに大成していない。倭建の業は半ばで挫折し、名前負けしている。

## 2 新嘗祭の新築祝い

◎**新築祝い** 倭建命の人格更新の場合、「新室築」・新築祝いの日だったのは、意義深いことである。「新室寿ひ」は、人の住む家屋の悠久の繁栄を予祝する祭りであり、また神を招請するための祭りでもあった。

神祭りのためには、「古室」も言霊のこもる寿詞によって「新室」に見立てられることさえあった。例えば『延喜式』に載せる「大殿祭の祝詞」でもって内裏の仁寿殿が新室扱いされ、「新嘗祭」(稲の収穫祭)が行われている。

後世の天皇の一世一度の即位式・大嘗祭は、この新嘗祭の形式を踏襲している。そして、その祭場である大嘗宮が祭りの直前に完成するように短期間に建てられているので、大嘗宮は新室でもあった。

景行紀によると、熊曾建の「新室築」は一月に執り行われたと記す。この「新室築」は「新室寿ひ」と同義で、神祭りのための新築祝いだった、と考えられる。九月から十二月は稲の収穫祭の時季なので、大和朝廷の新嘗祭と同様、熊曾建の新築祝いも新嘗祭にかかわる祝祭だったろう。

◎**新嘗祭** 稲の収穫祭・新嘗祭の実態は、時代、地方、階層によって種々だろう。古代の文献や現代に残る民俗は、新嘗祭の種々な相をみせている。

稲作文化は当然稲作儀礼を伴い、主食の位置を確保すれば稲作文化・稲作儀礼が社会構造の根幹になる。

◎**海幸山幸神話** 大和朝廷の基盤は稲作にある。そして、南九州も同じ稲作文化圏にあったことは、隼人が大和朝廷に服属した由来を語る海幸山幸神話に示されている。

神代記に伝える海幸山幸の神話は、次のとおりである。海幸彦、山幸彦は兄弟で、海幸は隼人族の遠祖、山幸は天皇家の遠祖だった。山幸は、海幸に頼んで生業の道具を交換してもらおう。しかし、獲物が獲れないどころか兄の釣り針も失った。釣り針の紛失を許してもらえなかった山幸は、神の教えで海神の宮へ行くと歓待され、海神の娘・豊玉毘売と結婚する。三年後に釣り針のことを思い出し、釣り針を見つけてもらう。そして、兄に釣り針を返す時の呪言と呪物を授けられ、

兄が高田を作ったら下田を作り、兄が下田を作ったら高田を作れ、と教えられる。こうして弟の山幸だけが豊作になり、これを恨んで攻めてきた兄の海幸を呪物で懲らしめ、兄の海幸が弟の山幸に服属を誓った。この時の海幸の苦しむ所作が「隼人舞ひ」の起源になり、宮廷の新嘗祭で「隼人舞ひ」を奉獻することが隼人族の服属を示していた。

このように、狩猟を生業にする山幸（天皇家の遠祖）も、漁労を生業にする海幸（隼人族の遠祖）も、共に稲作を営み、この稲の豊作・不作が貧富・勢力の強弱を決している。そしてこのように大和朝廷も南九州の隼人も同じ稲作文化に立脚していればこそ、両者の服属関係も成り立ちやすい。

同じ南九州の熊曾の大和朝廷への服属も同類で、熊曾建の催した一二月の新築祝いが新嘗祭にかかわるとすると、熊曾征討物語の内容もよく理解できる。

◎穀物税の起源 神から授けられた稲種を守り育てて刈り上げを迎え、神に初物を捧げて感謝するのが、新嘗祭である。神から授けられた稲種とその初物を、「チカラ（力）」という。主食の穀物は生きていくための「力」であり、その元を神が与え、それから得た収穫物のお初をお礼として神に捧げている。その後者を、沖繩では俗に「神の税」といつている。それは、収穫物の初物を神に奉獻することが当然の義務だと考えているからである。この穀物の初物、神饌の多くは、司祭者の所得になる。

そして、これに祭政一致の体制がかかると、穀物の初物の「神のチカラ（力）」は為政者の所得になり、「人のチカラ（税）」に変わる。この「人のチカラ（税）」とは租税・穀物税のことで、例えば雄略紀十三年の条では「租賦」と言い、顕宗紀二年の条では「田税」ともいつている。こうして、為政者による租税・穀物税の徴収が、神権によって保証・正当化されている。ここに、税を徴収する責任者を「主税」

という由来がある。

このように、稲作文化地帯における新嘗祭の「チカラ（力）」の奉獻が「租賦」・「田税」（穀物税）の徴収に移行しているので、税の徴収に直結する新嘗祭を掌握した者が権力の座に就くことになる。このようにして、稲の耕作民の生活を保証する稲の祭りが権力の発生を促している。

◎新嘗祭の新築祝いと権力闘争 この意味では大和の権力も、南九州の隼人や熊曾の権力も、稲作を基盤にした祭政一致体制を鋭角化し、同一レベルにあった時代があり、互いに覇を競っていた。これがいわゆる「英雄時代」である。

そして、このように権力の中樞が稲の新嘗祭にあったので、権力闘争も自然と稲の新嘗祭を主たる場にしがちだった。熊曾征討が稲の新嘗祭の新築祝いを舞台にしているのは、その典型例である。

### 3 尊貴者の出現

◎尊貴者の出現 新嘗祭には当然、神が来臨し、これを最大の敬意をもって歓待しなければならなかった。祭場の社殿の新築も、そのためのものだった。しかし、来訪するのは神ばかりか、時には神に等しい貴い者が出現する場にもなった。貴い者は日常の場では出現せず、神祭りの晴の場に出現するからこそ貴い存在だった。

◎意祁・袁祁の名乗り 新嘗祭に神の他に尊貴者が出現した典型例として、意祁・袁祁の両王の流浪伝承がある。即位するまでの両王は「童」と表記されていないものの、「小子」・「少子」（清寧記）・「小子」（顕宗前紀）と記され、「童」に準じていよう。

意祁・袁祁の両王は、後に天皇として即位するものの、王時代は政変のために苦難の流浪をし、当時最も卑賤とされた馬飼、牛飼いに

まで身を落とした。両王が復活する劇的な場合は、播磨国で一月に催された新嘗祭における新築祝いだった(清寧記・顕宗前紀・播磨国風土記)。

稲種を授けた神は神の世界から遙々と旅してくると観想されており、これを模して神に扮した者が家々を来訪して祝福を与えている。ここでも、新嘗祭に参会する者が、祭りの作法に従って神の資格で順に祝福の歌舞をする。そして、袁祚王が本格的な新築祝いの歌謡を歌ってから名乗りを上げ、自分たちが尊貴者であることを明かしている。遠来の神は長旅ゆえに身をやつしている場合が多いので、ここで身をやつした両王が神に等しい尊貴な身分だと明かしたのは、祭りの論理に合致している。両王は直ちに皇位継承者と認められ、やがて即位している。

◎**童形の両王** 天皇の即位式は、大がかりな新嘗祭である。やがて皇位に登る両王が新嘗祭の新室で名乗りを上げるのは、極めて示唆的である。そして、即位するまでの両王が「小子」・「少子」だったのも、天皇の即位式が成人戒を原形にしていることを暗示している。「小子」・「少子」時代の両王は倭建命や雄略天皇のような勇猛な働きをしていないけれども、貴種でありながら最下層まで零落し、それから急上昇して天皇に即位するところに、神秘的な力が宿る童形の者を感得したのではなからうか。

◎**倭建命の出現** 新嘗祭にかかわる新築祝いの日に、性的に従属する立場に置かれた神的な恐るべき少年皇族・「倭男具那王(日本童男)」が、自らがいかに貴人かという名乗りを上げ、大和朝廷を代表する英雄になるのは、右の伝承と共通している。意祚・袁祚の両王の即位伝承は、熊曾征討物語における倭建の位相を浮き彫りにしている。

#### 4 成人戒と即位式

◎**赤面黒面** 新嘗祭・収穫祭が成人戒を伴うことは、沖繩の八重山諸島に伝わる六月の稲の収穫祭(穂利という)の赤面黒面が示している。この祭りには、秘密結社的人格をもつ男子の年齢階梯制が大きくかわっている。すなわち、赤面・黒面という夫婦の農神の出現をこの結社が担当している。そして同時に、この祭りに男子の結社に加入するための成人戒が付随し、数え年一五歳の少年が、結社の構成員の課す過酷な試練に耐えて成人として認められている。

筆者は島のみなさんのご厚意によって、西表島古見の赤面黒面の秘祭と成人戒を調査する機会を得た。その折、その成人戒の試練の激しさに思わず涙した。かつてはもっと過烈だったと聞き、共同体社会における成人戒の大きさが実感できた。

◎**久高島の名付け** 「イザイホーと名付け(久高島)」「畠山、二〇〇六a」によると、久高島では午歳の八月一〇日の柴差の日に、数え歳一五歳から二六歳の青少年を対象にして「名付け」という成人戒を執行っていた。この儀礼には根人(男神人の最高位)以下の男神人や大主たち(五一歳から七〇歳の長老たちで、男性の年齢階梯制の最上部を占める)が臨席し、根人が司祭する。青少年たちは一人ひとり名前を呼ばれ、一五歳から三歳刻みにウンサク、マクラカー、チクドゥン、ウヤウミイの名が、女性祭祀集団の高級神女・根神によって授けられる。そして、このことが神に報告され、神の加護の下に繁栄するように祝福され、彼らは神女、男神人、大主たちに挨拶する。

久高島には川がないので稲作はできないものの、琉球の五穀発祥の地という神話伝承があり、王府と共催で穀物の収穫祭(初穂祭・収穫祭という)を執り行っていた。また、この島の「名付け」は、王権レベルの影響もあって肥大化し複雑な様相を呈しているものの、本

来は毎年、この柴差しばさしの日に執り行っていた、と推定される。こうしてみると、この島の「名付け」の原質は稲の収穫祭に付随する成人戒だった、と考えられる。特にここで注目したいのは、共同体の構成員の繁栄を図る立場にある神女・根神ねがみが成人戒で青少年たちに名を賦与することである。

◎元服での名替え このあり方は本土においても同じことで、男子の元服でしかるべき権威ある立場の者が名付け親・烏帽子親えぼしおやなどになり、「名替え」と称してそれまで用いていた名の他に新しい名を付けていた。いわれるように、名を替えることは一人前の男子に生まれ変わることだった。

◎若衆踊りと二才踊り 沖縄本島とその周辺の島々の稲の収穫祭は、六月あるいは八月に行われる。とくに八月の場合、一〇日を折り目にして柴差しばさしをし、夏正月の元旦に定めている。

沖縄の収穫祭は、多く豊年踊り（村芝居とも）を伴う。これは奉納芸で、五穀の種物を賜った神に感謝して捧げるものである。この奉納芸に「若衆踊り」と「二才踊り」があり、殊に熱心に演じられる。これは、この収穫祭に成人戒が広く伴っていたことを想定させる。すなわち、収穫祭にともなう成人戒に「若衆」姿と成人長後の「二才」（成人）になっているので、成人直前の「若衆」姿と成人長後の「二才」姿を「若衆踊り」と「二才踊り」の形で神と共同体の構成員に披露しているようである。

『琉球舞踊入門』「宜保栄治郎、一九七九、二四頁」によると、「若衆踊り」は元服する前の一五・六歳の少年の踊りで、若衆は男でもなく女でもない人格的には無性格として扱われるので、振り袖をつけ、髪には花飾り（前花という）をつけている。また、『沖縄文化史辞典』「二才踊」の項目「一九七二、二九〇・二九一頁」によると、「二才踊り」は若者が黒紋付きの着物に、白鉢巻・黒白縦縞の脚絆・白足袋の凜々

しい出で立ちで逞しく踊る踊りである。

このように、主食の収穫祭と成人戒は芸能の発達も促している。

◎収穫祭の成人戒と即位式 以上、収穫祭に伴う成人戒の「名替え」で少年たちに名前が付与されて凛々しい成人になっていることが、熊曾の新嘗祭を場にして額に「瓠花ひまぼな」をした少年皇族が「倭建」の御名を献上されていることの意味を浮き彫りにしている。すなわち、「倭建」の御名献上が新嘗祭に伴う成人戒を背景にしていることを示しているよう。

前述したように、天皇の即位式は新嘗祭の形式をとっている。その即位式が新嘗祭の形式を踏襲するのは、新嘗祭が元来成人戒を伴っていたからで、この人格の更新をねらう成人戒を基盤にして天皇の即位式が生成していることを示しているよう。

◎薬狩りの成人戒と即位式 なお、成人戒が必ず稲の新嘗祭に付随するかというと、そうともいえないようである。『万葉の紫の発想』「畠山、二〇一〇」によると、四月から五月にかけて執り行われた薬狩りにも成人戒と成女戒が付随していた。それは、神代記の大国主神の受難と根国訪問の条、「はねかづら縷いと今する妹」を歌う万葉歌（四一七〇五・七〇六、七一一一一、七一一二、七一一三）、「紫の斑まだらの縷かづら」を歌う万葉歌（二二二九九三）、『伊勢物語』の初冠の段などから窺われる。とくに大国主神の根国訪問の条は、出雲国の王（大国主）になるための即位資格儀礼が薬狩りに付随した成人戒を基盤にしていることを示唆している。

## 引用文献・参照文献

- 秋本吉郎 一九六八 『風土記』 岩波書店  
 上田正昭 一九七三 『日本武尊』 吉川弘文堂  
 大野 晋 一九六九 『本居宣長全集 第十一卷』 筑摩書房  
 荻原浅男・鴻巣隼雄 一九七九 『古事記・上代歌謡』 小学館  
 宜保栄治郎 一九七九 『琉球舞踊入門』 那覇出版社  
 西郷信綱 一九八八 『古事記注釈 第三卷』 平凡社  
 一九八九 『ヤマトタケルの物語』 『古事記研究』 未来社  
 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野 晋 一九六八 『日本書紀 上』 岩波書店  
 櫻井 満 二〇〇〇 『日本武尊の世界』 『櫻井満著作集 第8巻 古代伝承の世  
 界』 おうふう  
 鳥袋盛敏・翁長俊郎 一九七七 『琉歌全集』 武蔵野書院  
 高崎正秀 一九七九 『古典と民俗学』 (下) 講談社  
 都倉義孝 一九七六 『景行天皇と倭建命―王権の正と負と―』 『古代の英雄』 有  
 精堂  
 中西 進 一九八六 『大和の大王たち』 角川書店  
 中鉢良護 一九九七 『伊平屋村田名のウンジャミ・シヌグの神歌』 『やんばるの  
 祭りと神歌』 名護市教育委員会  
 西山松之助 一九七九 『江戸市民と歌舞伎』 『歌舞伎十八番』 集英社  
 畠山 篤 二〇〇六 a 『イザイホーと名付け(久高島)』 『沖繩の祭祀伝承の研究  
 ―儀礼・神歌・語り―』 瑞木書房  
 二〇〇六 b 『カンジャナシー(久高島)』 『沖繩の祭祀伝承の研究―儀  
 礼・神歌・語り―』 瑞木書房  
 二〇〇六 c 『正月の神人の婚(久高島と野甫島)』 『沖繩の祭祀伝承の  
 研究』 瑞木書房  
 二〇〇六 d 『シヌグのチョジャマ(トンザマ)』 『伊平屋島』 『沖繩の  
 祭祀伝承の研究』 瑞木書房  
 二〇〇六 e 『ヤガン折目(栗国島)』 『沖繩の祭祀伝承の研究』 瑞木  
 書房  
 二〇〇六 f 『正月綱と爬龍船漕ぎ(黒島)』 『沖繩の祭祀伝承の研究』  
 瑞木書房  
 二〇一〇 『万葉の紫の発想―恋衣の系譜―』 『アーツアンドクラフツ』  
 福田良輔 一九六四 『倭建の命は天皇か』 『古代語文ノート』 桜楓社  
 藤井貞和 一九七八 『亡滅の歌声』 『古日本文学発生源論』 思潮社  
 外間守善 一九七二 『おもしろ概論』 『おもしろさうし』 岩波書店  
 外間守善・西郷信綱 一九七二 『おもしろさうし』 岩波書店  
 外間守善・玉城政美 一九八〇 『南島歌謡大成 I 沖繩篇上』 角川書店  
 母子愛育会編 一九七五 『日本産育習俗資料集成』 第一法規  
 真栄田義見・三隅治雄・源武 雄 『沖繩文化史辞典』 東京堂出版  
 守屋俊彦 一九八八 『ヤマトタケル伝承序説』 和泉書院  
 吉井 巖 一九七五 『ヤマトタケル物語形成に関する一試案』 『天皇の系譜と神  
 話 二』 瑞木書房  
 一九七六 a 『倭建命天皇説に加える一徴証』 『天皇の系譜と神話 二』 瑞  
 木書房  
 一九七六 b 『孤独の皇子ヤマトタケル』 『天皇の系譜と神話 二』 瑞  
 木書房  
 一九七七 『ヤマトタケル』 学生社

(本学の日本語・日本文学科と文学研究科に十四年間奉職され、私た  
 ちを導くとともに多大な貢献を上げられた森田喜郎博士に、この論  
 文を捧げます)